

第2節 「短刻線文土器群」と「余市式土器」の製作手法と器種構成

瀬川 拓郎

I. はじめに

今回の千歳6遺跡の調査により、中期終末から後期初頭に位置づけられる土器の一括資料を得た。即ち、短刻線文および貼付帯によって特徴づけられる土器(Ⅲ2a群土器)と、それに類似した文様構成をもつが、製作手法の点で区分される土器(Ⅲ2b群土器)、および、所謂トコロ6類近似の土器(Ⅲ2c群土器)の3種である。本論で扱う資料は、このうちのⅢ2a群土器とⅢ2b群土器の2種である。

第3章で大島が詳しく述べるところであるが、前者は、従来「ノダップⅡ式」「煉瓦台式」「静狩式」などと呼ばれてきたものの一部に相当する。しかし、上記の各型式の多くは、その内容が十分に吟味されているとは言い難く、本遺跡出土土器をそのまま対比するのは困難である。そこで、このⅢ2a群土器に「短刻線文土器群」の名称を冠し、従前の型式群と区別した上で、それが「短刻線文土器群」として一括される所似について、製作手法・器種構成から述べる。また、後者は、従来「余市式」と大きく一括されてきた土器群の一部に対比可能である。しかし、この余市式土器と短刻線文土器群の区分は、両者の文様構成が類似していることもあって、明確にされているとは言い難い。例えば大沼は、貼付帯上の短刻線文の有無を両土器群識別の指標にしているように思われるが、それが指標たりえないことは、短刻線文土器群の文様構成の観察からも明らかである。本遺跡出土土器をみる限り、両土器群のちがいは、その製作手法および器形において最も明瞭に理解される。そこで、本遺跡出土の余市式土器についても、その製作手法および器種構成の分析を行なう。さらに、この余市式土器の出土資料数の不足を補うために、実見の機会を得た他遺跡出土資料についても述べる。

以上の作業によって、両土器群の内容を明らかにするとともに、その相違点を指摘し、区分された両土器群がどのように位置づけられるのか、その系統を中心に述べてみたい。

なお、両土器群の文様構成については、第3章で分類を行なっているので、ここでは繰り返さない。

II. 短刻線文土器群の製作手法と器種構成

1. 製作手法

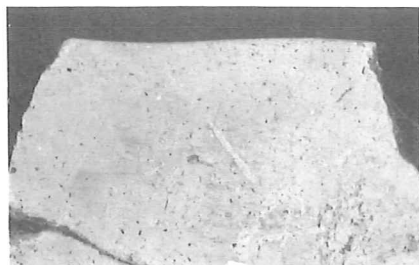
胎土 本土器群の胎土には、一般に砂粒が多く混入されている。このことは、器面の剥落した諸例の観察から明らかであるが、例えば、接合を行なっても手易く剥離してしまうことは、経験的にこれを裏付けるものであろう。しかし、後に述べる余市式土器に較べて、相対的には砂粒が少なく、胎土がより緻密であると言える。余市式土器は、一般に内外面に限らず風化した器面のように細かくザラついた感触を与えるが、本土器群の器面は、調整の緻密さとも関連して、より平滑な面をなし、砂粒の浮きが少ない。なお、細角礫を多量に混入した例がいくつか認められた。石質については、肉眼観察のため明らかでない。土器の胎土および焼成温度とも関連する土器の色調については、明るいオレンジ系、黄白色系の色調を呈するものが多い。

成形 本土器群の成形は、観察できた事例については全て粘土帯の輪積み法によって行なわれている。(1例coilingによると思われるものもあった。第2章図135-5)。粘土帯はいずれも下端が凹面を、上端が凸面を見せるもので、これによって底部から口縁に向かって順次成形が行なわれたことがわかる。粘土帯は幅をそろえて成形されており、その割れ口は直線状をなす。粘土帯上端の凸面は全て内面側にせり上がり、逆に下端は外面側にせり出している。このため、往々にして、器外面に、あたかも貼付帯を巡らしたかのように微弱な隆起が生じることがある。このような粘土帯合わせ目の隆起に貼付帯風に意識して施文を行なっている例をいくつか確認したが、本土器群の貼付帯がごく微弱なものであるために、隆起帯自身、粘土帯の接合によって生じたのか、あるいは貼付されたものであるのか判別しがたいものが多い。

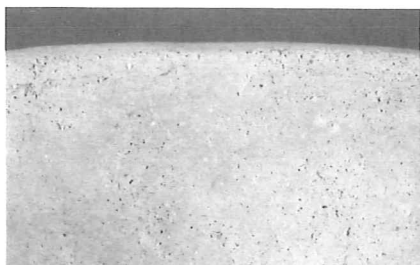
底部は平底で、底面は凹凸を残さず平坦に成形が行なわれている。底部の成形は、まず最初に円盤状の粘土板を作り、この上に直接粘土帯をのせるものと、粘土円板の周縁を粘土帯で囲むものがある。底部の成形法を最も明瞭に示すものとして、SR25 堅穴出土例がある(第2章図17参照)。これは、筒状の小形の芯を粘土ひもで囲んで粘土円板を作り出し、さらにこの粘土円板の周縁を粘土帯で囲んで器壁を形成している。粘土円板の成形が2工程に及ぶことを示す例である。

口唇部は、意識して平坦面の作り出しが行なわれている。この面には凹凸やゆがみはあまり見られない。口唇の両側に明瞭な角をもち、なかには刃物で切り揃えたような平坦面と角をもつものがある。

本土器群の成形は、全体に丹念に行なわれている。幅と厚さを揃えた粘土帯を用いて成形を行なっているためか、同じ部位での器壁に不揃いな厚薄の差は認められず、指頭による成形痕もほとんど見られない。このことは、後に述べる余市式土器の成形と比較した場合、明らかな違いとして理解される。

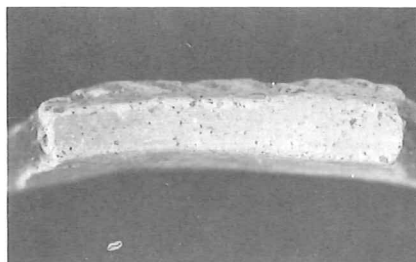


a

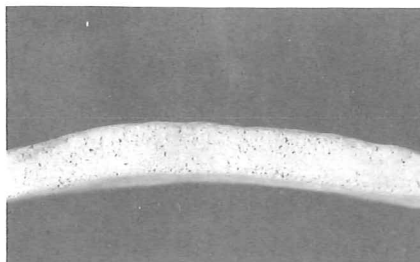


b

写真1 短刻線文土器群の内面 それぞれ口縁付近の内面の状況を示した。指頭圧痕を残さず、砂粒をよく鎮静している。



a

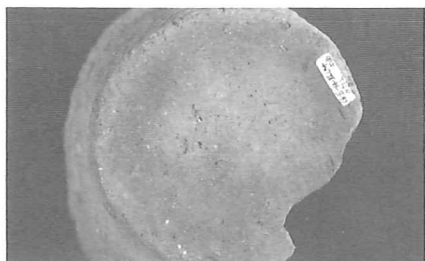


b

写真2 短刻線文土器群の口唇 口唇はナデが行き届き、両端には角がつく。また、その幅もほぼ一定である。

調整 本土器群の調整は全体にいていねいである。内面は、ほとんどがナデによる調整が加えられており、わずかな成形時の指頭圧痕についてもこれの平坦化が行なわれている。また、粘土帯接合面は全てつぶされており、器面にそのすきまを残さない。ナデは、内面の底は同心円状に、そこから口唇下数cmの部位まではタテ、あるいはやや斜めに行ない、その上については横方向に行なうものが多い。調整の順は、下半のタテ方向のナデを行なったのち、上半の横方向のナデを行なっているのが、特に後に述べる細密条痕の切りあいから理解できる。内面にミガキが行なわれているもの、あるいはあたかもスリップが施されたかのように緻密な面を見せるものがあることも、特徴的と言えるであろう（写真1）。

口唇部にもていねいなナデが施され、またここに細密条痕を見せる例がある。このナデによって、口唇部のわずかな凹凸やゆがみがおさえられている（写真2）。ナデは器面の縄文施文後に行なわれている。底部の底面は、ナデあるいはミガキが施されて平滑な面をなし、にぶく光沢をみせる（写真3）。また、この底面の調整に伴うものと思われるが、縄文施文後の底部端周縁に0.5～2.0cmの幅でナデを加えるのが、大半の例に認められた（写真3）。これは、土器を口縁を下にして置き、底面の調整を行なう際に、親指が調整具をはさんで底部端に押しつけられ、そのままの状況で土器を回転

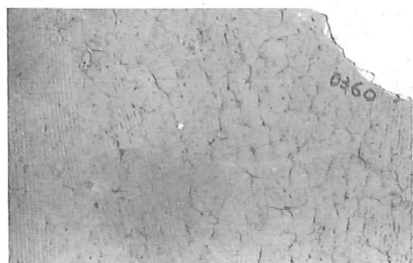


a

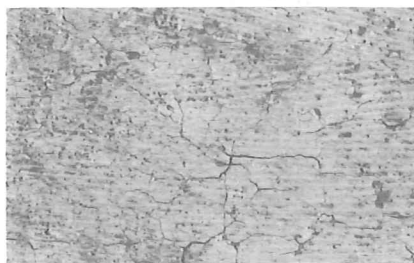


b

写真3 短刻線文土器群の底面（a）および底部端（b） 底面はナデあるいはミガキが加えられ、平滑な面をなし、胴への移行部は明瞭な角をもつ。施文後の底部端に親指幅のナデを加えるのも、本土器群に特有な調整法である。



a



b



c

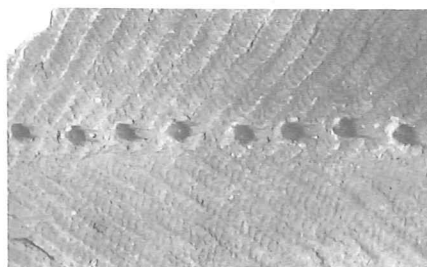


d

写真4 短刻線文土器群の内面に残る細密条痕 短刻線文土器群の内面にはしばしば、弱い凹凸断面をみせる細密条痕が観察される（a）。b・c・dは、その拡大した状況を示す。

させ、調整を行なったために生じたものであろう。ナデの幅0.5～2.0cmは、親指の横幅の範囲内に納まるものである。この底面、底部端の調整によって、底面と器壁の移行部は、明瞭な角をもって仕上げられている。

尚、短刻線文土器群として一括したなかに、刷毛目状の細密条痕³⁾を残すものが多く認められた。この条痕は一般にごく微弱な凹凸断面をみせるが（写真4）、なかには刷毛目とごく似た印象を与えるものもある。しかし、いずれの例も、器面の凹部にま



a



b

写真5 短刻線文土器群の縄文 短刻線文土器群の縄文は、条がよく通り、節が深く印される。縦走・横走する例はなく、全て斜行の縄文である。

で条痕が及ぶ点から、木質の原体は想定しにくい。同じ短刻線文土器群を大量に出土した知内町湯の里遺跡の資料の一部について実見する機会を得たが⁴⁾、このような細密条痕をもつ例は確認できなかった。細密条痕を残す調整が、本遺跡における短刻線文土器群に固有なものかどうかは現時点では明らかにできないが、道南の各地で出土している短刻線文土器群について、その分布を追っていくことは、地域性あるいは「集団」の折出の問題とあいまって、興味深い課題である。

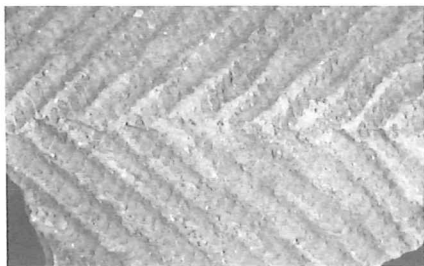
施文 縄文は、全例単節の斜縄文である。斜縄文は、原体の横方向の回転によるものが大半を占め、縦方向の回転によるものは多くない。この点について湯の里遺跡の資料の観察を行なったが、ここでは縦方向の回転による斜縄文が多く認められた。短刻線文をもつ土器のうちから無作為に20点を抽出したところ、このうち17点が縦方向、あるいは縦方向と横方向に施文した縄文の組み合わせをもつものであった。このことから、短刻線文土器群全体としては、原体の横方向、縦方向の回転の出現率について一定の傾向は認められないかもしれない。

本土器群の縄文は、条が通り、節が器面に深く印されており、縄文の施文単位の判別が容易に行なえないほどである(写真5)。縄文の施文順序が例外なく斉一性を見せる点も、特徴的と言えるであろう。すなわち、縄文は、底部から上方へ順に施されており、特に羽状の交点や貼付帯部では、下方の縄文の上に上方の縄文がかぶっているのが明瞭に観察できる。

貼付帯は一般にごく低平・微弱なものである。一見しただけでは、貼付帯があるかどうか判別し難い場合もある。また既に述べたように、粘土帯合わせ目の隆起とも区別し難い例が多い。貼付帯は、土器の成形が終了した段階で、くびれのくる肩と口縁端部に巡らせており、この2本が対になるモチーフが大半を占める。貼付帯を垂下させるもの、「し」の字状に配するものも少数見られる。貼付帯の成形は、粘土ひもを巡らして器面に強く押しつけ、上・下端をナデて器面に密着させるものである。貼付帯が低平・微弱で、器面との境が判別し難いのは、このような成形上の特質による。貼付帯の成形後、縄文の施文が行なわれる。縄文は、先に述べたように底部から順に

施文が行なわれるが、この貼付帯部における縄文施文は、かなり明瞭な規則性をみせる。すなわち、縄文は、貼付帯の中央あるいは下端を境にして分けて施文されるのである（写真6）。貼付帯上端を境にして施文を行なったり、貼付帯をまたいでその上下の器面に一連の施文を行なう例はみられない。この規則性は、貼付帯を境に羽状に縄文が施される場合はもちろん、そうでない場合にも一貫して認められる。貼付帯間を無文とする例については（写真7）、このような縄文の施文を終えたのちにナデ消しを行なっている。この無文帯作出の方法は、後に述べる余市式土器のそれと明らかに区別される。

短刻線文土器群の指標たる短刻線文は、貼付帯あるいは器面上に直線的に施された連続する刻み目である。短刻線文個々は、施文具のちがいによってそれぞれ印象は異なるが、どれも横長の楕円形あるいは長方形を呈し、円形のものほとんど認められない。短刻線文施文原体は、大きく分けて2つある。1つは、先端の丸い棒状のもの、ヘラ状のものおよび半戴竹管であり、1つは、縄文の施文原体を2つに折るなどして

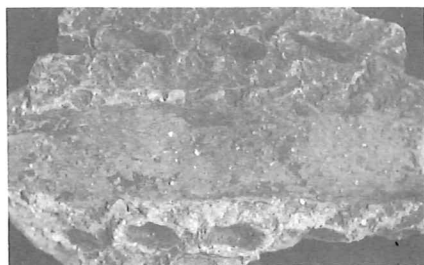


a

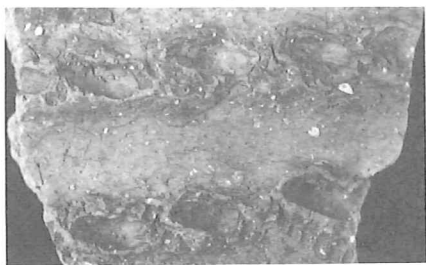


b

写真6 短刻線文土器群の貼付帯部における縄文の施文 短刻線文土器群の縄文は、底部から口縁にむかって順次施されている。このとき、貼付帯部の縄文は、必ずその中央（a）か下半（b）をさかいに分けて施される。貼付帯をまたいで上下の器面と一連の縄文を施したり、あるいは貼付帯上に器面の縄文とは別に施文を行なう例はない。



a



b

写真7 短刻線文土器群の無文帯の形成 短刻線文土器群の無文帯は、2本の貼付帯にはさまれた間を、器面および貼付帯の縄文施文後にナデ消して形成している。貼付帯上に短刻線文が施される場合、その施文は、ナデ消しによる無文帯の形成後に行なわれる。

その先端を用いるものである。前者について実験的に確認したところによれば、短刻線文の大半は、これらの原体の先端を器面に対して直角に当て、左に移動させつつ徐々に器面に押し込み、そのまま引き上げることによって施されている。この施文の際の押し込みの深浅、引き上げ角度の違いによって、少しずつ印象の異なるバラエティーが生ずるのである。短刻線文の左端に丸く粘土の残る例があるが、これは、半戴竹管内面を左に向けて器面に直角に当て、左方に移動させつつ押し込み、そのまま垂直に引き抜いたため生じたものである。後者の縄文を原体とする例は、ごく少数である。なお、縄文およびへう状工具を除く短刻線文原体については、短刻線文の幅が3mmから6mmの間に納まるものであることから、工具に使用された原体が植物茎であると想定した場合、同一種のものに限定されていた可能性が考えられる。また、短刻線文の施文方向は、施文によって周囲に押し出された粘土のかぶりあいから確認できたいくつかの例によれば、いずれも反時計回りであり、このことから、土器を反時計回りに少しずつずらしながら施文を行なったものと考えられる。

2. 器種構成

本遺跡出土の短刻線文土器群のうち、器形および口径がおおよそ復元可能なもの（その一部を図230に示した）について、その口径をグラフ化したのが表1である。この表から、器形の違いも考えあわせて、5つの群が抽出できる。すなわち、口径が26～30cmの大形の深鉢の1群（A群）、口径が18cmを前後するやや大形の深鉢の1群（B群）、口径が12cmを前後するやや小形の深鉢の1群（C群）、口径が6～8cm前後の小形土器の1群（D群）、口径が14cm前後の壺形土器（E群）。これら各群の土器は、その器形から、さらにいくつかに分けられる。大形の深鉢であるA群の土器は、頸部が弱くくびれ口縁の外背する類（A1類）と、頸部にくびれない類（A2類）に、やや大形の深鉢であるB群の土器は、器形の上で上記のA1類・A2類に対応するB1類・B2類と、加えて一例のみであるが筒形の器形のもの（B3類）に、やや小形の深鉢であるC群の土器は、やはりA1類・A2類に対応する器形のC1類・C2類に、小形土器であるD群は、頸部にくびれないD1類、器形が逆台形のD2類、筒形のD3類、底が丸く作り出されたD4類に、それぞれ分けることができる。これらA～E各群を“大別器種”、そのうちの細分された各群を“細別器種”と呼んでおこう。

以上の分類に従って各群土器の観察を行なった結果は次の通りである。まず、各群ごとの量的関係であるが、細破片が多く実数はとらえきれないものの、A・B・C各群が多数を占めることは確かである。小形土器であるD群も、かなりの量が出土している。遺構出土の例に限ってみても、大半の竪穴から1ないし2個体分のD群土器が検出されている。壺形土器であるE群は、数個体分を確認しているだけで、全体数に占める割合はわずかなものと推定される。小形土器D群中における各細別器種ごとの量的な関係は、D1類が多く、D2・D3類がこれに次ぎ、D4類は稀少である。各群

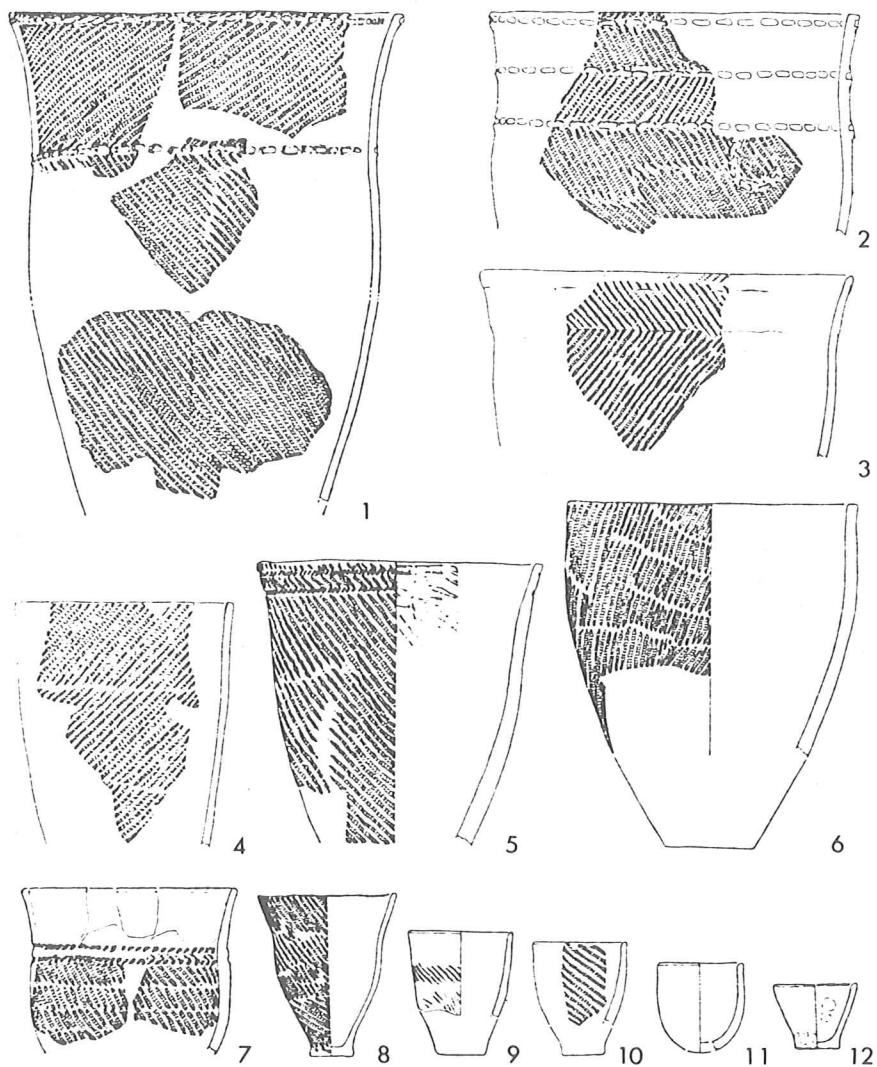


図230 千歳6遺跡出土の短刻線文土器群 復元実測を行なったものを図示した。表6の器種分類に従えば、1～3はA1類、4はB2類、5はB1類、6はB3類、7はE群、8はC1類、9・10はD1類、11はD4類、12はD2類にそれぞれ相当する。縮尺1/6。

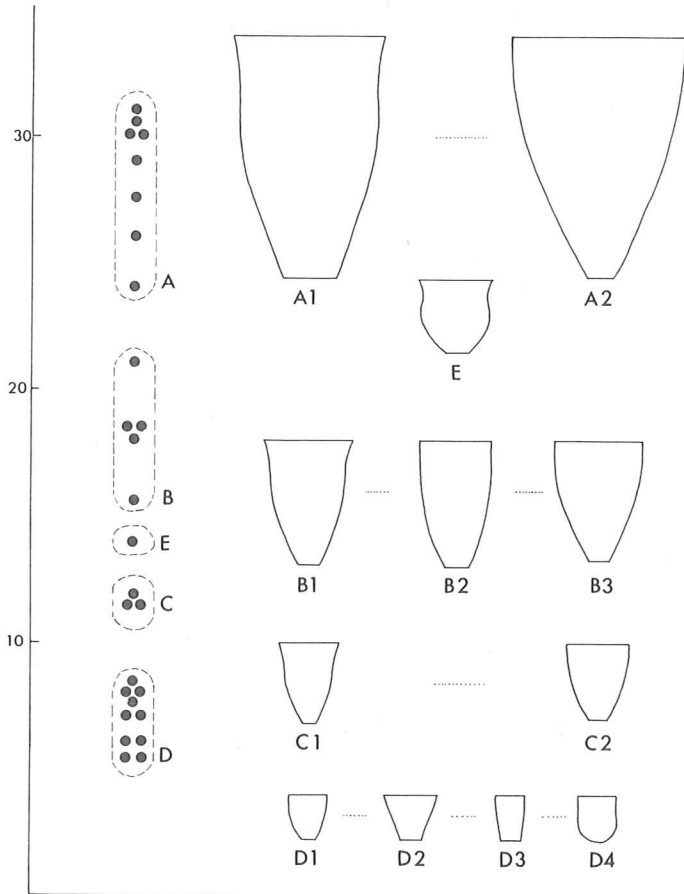


図231 千歳6遺跡出土短刻線文土器群の器種分類 上表は、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径の大きさをドットで示したものである（単位cm）。この表から、器形の違いも考えあわせ、口径の大きさのまとまりによって5つの群が抽出できる。右に示したA～Eの各群がそれで、このような口径のまとまりによって設定された各群は、さらにその器形の違いから、A1・A2、B1・B2……と細分される。

の文様構成は、まずA～Cの3群のうち、A1・B1・C1類とした頸部のくびれるものについては、短刻線文・貼付帯の施される例が多数を占め、A2・B2・C2類とした頸部がくびれないものについては、縄文以外の文様要素をもつものがほとんど認められない。また、前者のA1・B1・C1類には、器壁が薄く作りのていねいな例が多い。小形土器であるD群は、無文例が多数を占めることが特徴的である。縄文が施されるものは、D群のうちD1類に限られる。土器内面の炭化物の付着は、A～

C各群の例には認められるものの、D群については、C群土器の底部を利用し、口縁を打ち欠きによって2次的に作り出したと考えられる例を除いて、その付着は認められない。

これら各群・各類の土器は、既に見てきた製作手法上の斉一性から、時間的な差をもって生じたものとは考えにくい。むしろ、短刻線文土器群における土器のセット関係を示すものと理解すべきであろう。そして、その場合各器種は、上記の各群類別の土器の観察から、次のように位置づけられる。A～Dの各群土器は、その出土量から、日常的に欠くことのできないセットであったと考える。このうち、A～C群土器は、炭化物が付着する例があること、およびその大きさから、煮沸・貯蔵の用途を想定し得る。A～C各群における細別器種については、文様構成から、頸部にくびれのあるA1・B1・C1類を精製土器として、頸部にくびれないA2・B2・B3・C2類を粗製土器として理解することができるかもしれない。小形土器であるD群については、炭化物の付着が認められないこと、およびその大きさから、供献の用途を考える。器種の分化が著しい⁵⁾事実は、日用のみならず祭儀にもわたる供献の機能を示唆するものと理解したい。

壺形土器のE群については、その出土数の僅少さから、日常的なセットの一部をなしていたとは考えにくい。集落単位で執行された祭儀に伴ったものであろうか。ベニガラ塗布された例(第2章図83—82)が存在する事実は、ハレの器として祭儀の用をなしたとする想定を裏付けるものと考ええる。

III. 余市式土器の製作手法と器種構成

1. 製作手法

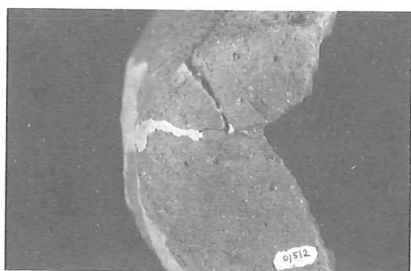
胎土 余市式土器の多くは、胎土に多量の砂粒を混入している。このため既に述べたように、ナデによる調整が行なわれているにもかかわらず、器面はザラついて、もったりとした印象を受ける。しかし一方では、胎土に全くといってよいほど砂粒あるいはその他の夾雑物を含まないものがある(第2章図90—14—20)。土器の胎土および焼成温度とも関連する土器の色調については、暗褐色を呈するものが多い。

成形 本群の土器についても、輪積みによる成形が行なわれているが、短刻線文土器群に多く認められる粘土帯接合面からの剝離、そこに見られる凝口縁は、この群では一例も認められない。このことは、粘土帯個々の積み上げが、乾燥をまたず短時間のうちに行なわれたことを示すものであろう。器面で観察し得た事例によれば、粘土帯の接合面は不整な波形を呈しており、積み上げの最終である口縁部では、粘土帯の凹部に粘土を足して平らに成形を行なっているものもある。乾燥時間が短い成形上の特質によるものであろうか、器内面には指頭による成形痕が著しく残る(写真8)。

底部の成形法は断面観察からは明らかにできなかった。しかし、底部端にケズリや

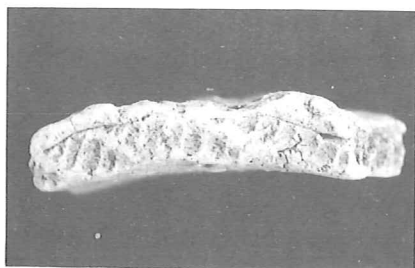


a

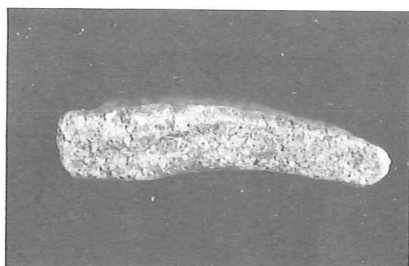


b

写真8 余市式土器の内面（a）と底面（b） 内面・底面とも、指頭による成形痕や凹凸が残る。ナデも粗雑で、砂粒の押えが甘い。



a



b

写真9 余市式土器の口唇 aは縄文の施された例、bは無文の例である。一般に幅が一定でなく、ナデも粗い。a・bとも、口縁端部に貼り付けられた帯と器面のすきまがナデ消されずに残る。

指頭の押圧を加える例があることから、粘土円板の上に粘土帯を積む方法がとられたものかもしれない。底面は、ほとんど成形時そのままの凹凸を残す（写真8）。底部には、平底のものと、やや上げ底気味のものがあり、底部端がわずかに張り出す点が特徴的と言える。

口唇は、平坦に作り出されるが、幅が一定でないものや、ゆがみをもつものが多い。また、口縁端部に貼り付けた粘土帯と器面のすきまがナデ消されず、口唇面にそのまま残る例が多く見られた（写真9）。

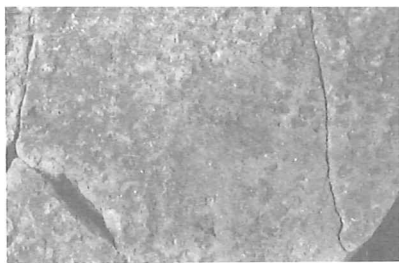
調整 器内外面にはナデ調整が施される。ナデは一般に粗く、成形時の凹凸や粘土帯合わせ目のすきま、貼付帯と器面とのすきまは、埋め残される場合が多い。

施文 縄文は、単節と複節が用いられている。特に複節の縄文は、短刻線文土器群には認められない要素である。縄文は、単節・複節に関わらず縦方向の回転によって施文を行なうものが多い。縄文はどれも浅く印され、条が通らない。また施文単位間が縄文で埋められず、その間が空白となることが多い（写真10）。底部から口縁に向かって短刻線文土器群の縄文施文順序の規則性は、ここでは認められない。

貼付帯は、上下端をナデず、器面との間に明瞭な段をもつのが特徴である。ただし、



a

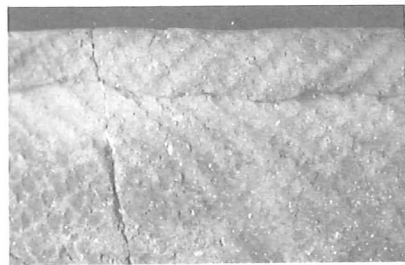


b

写真10 余市式土器の縄文 余市式土器の縄文は、条が通らず、プレスも弱い。また、施文単位間や器面の凹部は空白のまま残される。斜行縄文が一般的だが、縦走・横走する例も認められる。aに複節縄文の例を、bに単節縄文の例を示した。



a



b

写真11 余市式土器の貼付帯 余市式土器の貼付帯には、器面の縄文施文後に貼り付けを行なうものと、器面の縄文施文前に貼り付けを行なうものの2種がある。写真はいずれも前者の例である。貼付帯は、厚さ・幅が一定でないものが多い。貼付帯部の縄文は、器面と連続することなく別個に施される。

口縁端部にのみ1条貼付帯を巡らせるモチーフの場合、その下端をナデつけて器面に密着させるものもある(第2章図134—28)。しかし、いずれの場合も、貼付帯の幅は一定でなく、厚薄の着が差しい(写真11)。貼付帯部での縄文は、短刻線土器群のように貼付帯下端あるいは中央を境に分けて施文されることがなく、帯上に器面とは別に施文を行なうか、縄文施文後の器面に帯を貼り付け、その後さらに帯上に施文を行なうものである。このような貼付帯によって無文帯を形成する場合、無文部は縄文施文前の器面をそのまま利用しており、その後器面や貼付帯に施文を行なった際、無文部にはみだした縄文は、ナデ消されずに残るのが特徴的である。

縄線文は、口縁端部、底部端あるいは胴部に「ハ」の字状に施されるが、一般に、短刻線土器群のそれに比較して、粗く、太目である。

口唇部に縄文が施された例が多いことも、短刻線土器群と区別される点である。短刻線土器群にも、数点口唇に縄文を施したものが認められたが、数量的に例外的な要素とすることができる。

2. 器種構成

本遺跡出土の余市式土器のうち（その一部を図231に示した）、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径をグラフ化したのが表2である。この表から、短刻線文土器群のA～D各群にほぼ対応する4つのグループが抽出できる。すなわち、口径が24～29cmの大形の深鉢の1群（A群）、口径が16～18cmのやや大形の深鉢の1群（B群）、口径が13cm前後のやや小形の深鉢（C群）、口径が9cm前後の小形土器の1群（D群）。このうち、大形の深鉢であるA群の土器は、逆「ハ」の字状

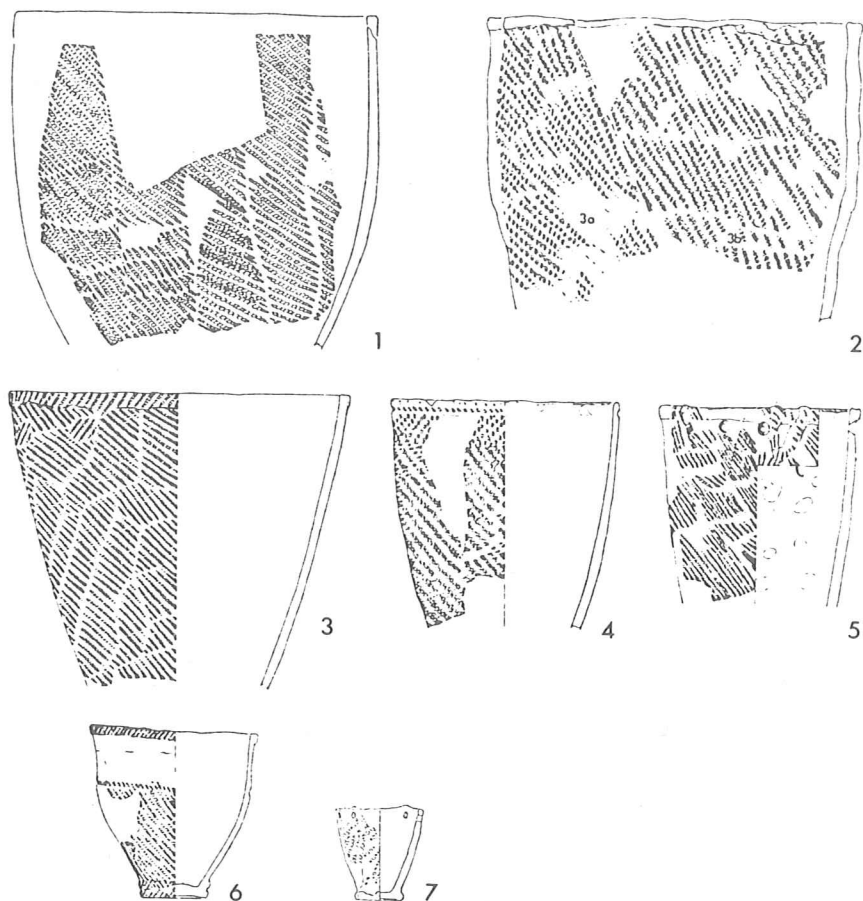


図232 千歳6遺跡出土の余市式土器 復元実測を行なったものを図示した。
表7の器種分類に従えば、1・2はA1類、3はA2類、4・5はB群、6はC群、7はD群にそれぞれ相当する。縮尺1/6。

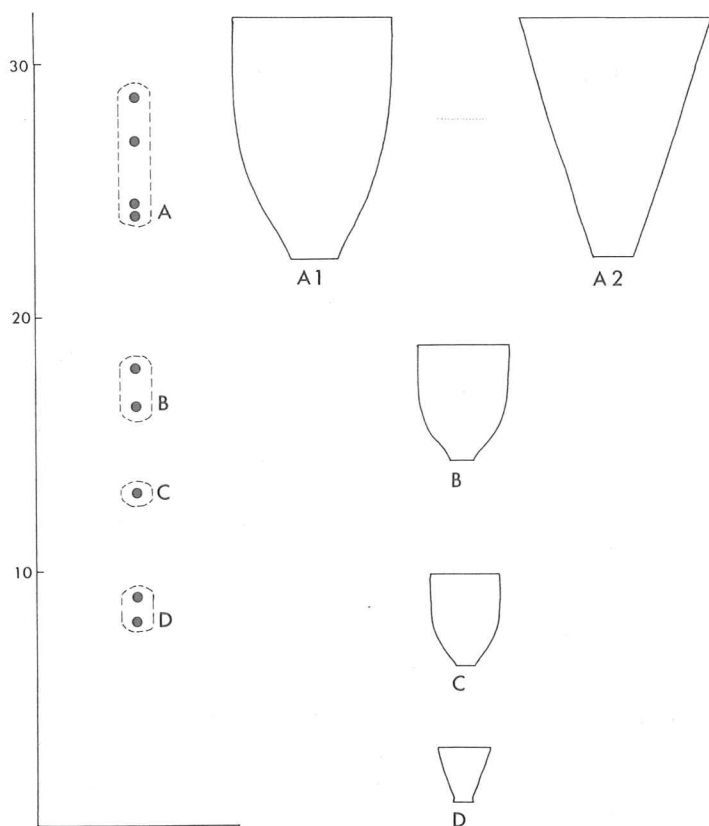


図233 千歳6遺跡出土余市式土器の器種構成 上表は、器形および口径がおおよそ復元可能なものについて、その口径の大きさをドットで示したものである（単位cm）。この表から、器形の違いも考えあわせ、口径の大きさのまとまりによって4つの群が抽出できる。右に示したA～Dの各群がそれで、そのうちA群は、その器形の違いからA1・A2の2つの類に細分される。

の器形をもつA1類と、口縁が直立し、胴下半が丸みをもってすばまるA2類に細分が可能である（ただし、A・B類については、図231の1と2、あるいは4と5を比較すればわかるように、口縁が直立し、胴下半が丸みをもつ比較的作りのていねいな類と、口縁が直立し、全体の器形が筒形に近い粗い作りの類にさらに細分できる可能性もある）。

これらの分類に従って各群の土器を検討したが、資料の僅少さもあって、各群あるいは各類ごとの量的関係は不明であり、文様構成についても、各群類ごとに異なるモチーフは抽出し得なかった。

A～D各群の土器は、製作手法の上で様々なヴァリエーションをみせるものの、全ての点にわたって粗雑であるという共通性をもっており、大きく1時期としてくることに問題はないと考える。しかし、本遺跡で出土した資料のみでは、それらが全て同時に利用されていた土器のセットを示すのか否か判断を下すのは難しい。仮に、1つのセットを示すものと考えたにしても、本土器群を伴う明確な居住遺構が検出されていない事実から、当期の遺跡の利用が野営程度とした場合、遺跡に持ち込まれ、遺棄された土器が、本来のセットの全ての器種を満たしていたかどうか疑問の残るところである。

3. 他遺跡出土資料の検討

先に指摘した本遺跡出土の余市式土器の過少さを補う意味で、実見し得た他遺跡資料について述べてみたい。

図232(写真12)⁶⁾に示した土器は、それぞれ図232-2(写真12-2)が長万部町静狩貝塚表採品、図231-1・3(写真12-1・3)⁷⁾が虻田町高砂貝塚出土品である。

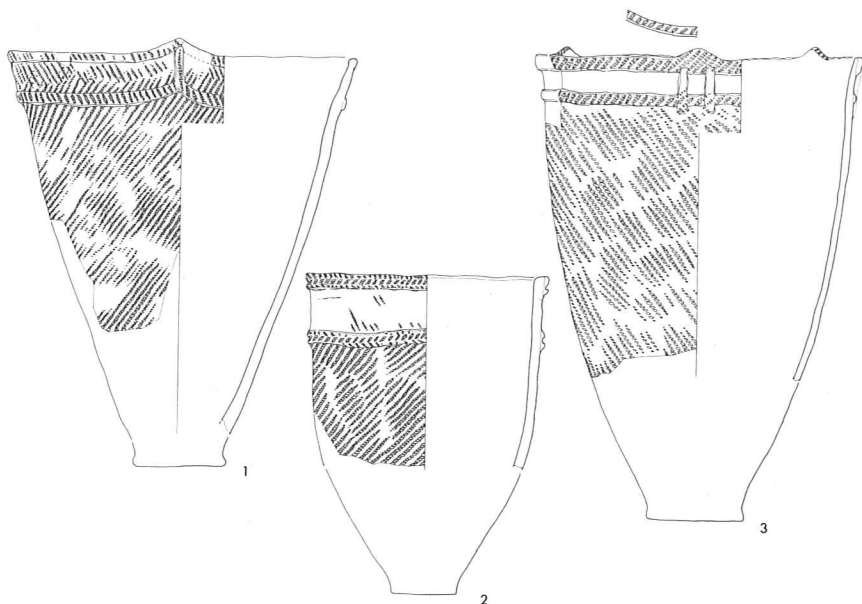


図234 他遺跡出土の余市式土器 1・3は、虻田町高砂貝塚出土品で、註7文献第3図掲載のものを復元実測。2は、長万部町静狩貝塚表採の未発表資料を復元実測した。1～3は、それぞれ写真12の1～3に対応する。縮尺は1/6。復元実測は瀬川による。

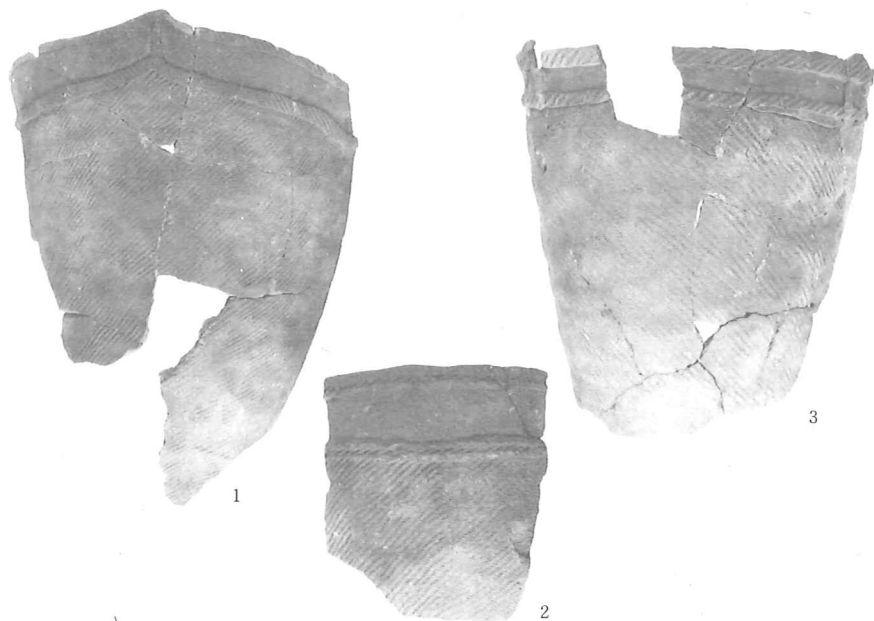


写真12 他遺跡出土の余市式土器 1・3は蛇田町高砂貝塚出土品(註7参照)、
2は長万部町静狩貝塚表採品(註6参照)。いずれも札幌医科大学第2解剖学教
室保管。

3例はいずれも、口縁部に貼付帯によって画された狭い無文帯をもつ深鉢形土器である。復元口径は順に、29cm、20cm、27cmを計り、本遺跡の器種分類に従えば、それぞれA群2類、B群、A群1類に対応する。器面の縄文は順に、RL、RL、LRが縦位回転で施されており、本遺跡出土の余市式土器に、縄文の縦位回転の出現率が高い事実と符合する。縄文のプレスは弱く、さらに施文単位間および器面の凹部に空白が残る。器面の縄文施文は、2・3では帯の貼り付け後、1では帯の貼り付け前に行なっている。成形・調整は、3例とも相対的に丹念に行なわれているが、胎土に砂粒を多く含むこともあって器面はもったりとし、成形時の細かい凹凸が内外の器面に残る。1・2の無文帯は、縄文施文前の器面を利用しており、器面および帯上に施文を行なったのちも、無文部にはみ出た縄文のナデ消しは行なわれない。

以上、他遺跡出土資料について観察を行なったが、その器形および製作手法は、細部にわたって本遺跡出土の余市式土器に類似するものである。このことから、本遺跡出土の余市式土器に関する製作手法・器種構成の分析結果は、一定の普遍性をもつと考える。

Ⅳ．短刻線文土器群と余市式土器の区分

以上の短刻線文土器群・余市式土器それぞれの製作手法・器種構成のまとめとして、両者の相違点を明らかにしておこう。

製作手法 両者の基本的な相違点として、まず胎土の違いを上げることができる。余市式土器の胎土は、一般に多量の細砂粒を含む。短刻線文土器群の胎土は、相対的に砂粒の混入量が少なく、より緻密である。焼成温度とも関連する土器の色調については、前者は暗褐色・暗黄褐色を呈するものが多く、後者はオレンジ系の明るい色調を呈するものが多い。

成形について、短刻線文土器群では、幅・厚さとも一定の粘土帯を用意し、乾燥を待ちながら順次積み上げを行なっている。その結果、器壁の厚さに不揃いがなく、破片割れ口には擬口縁が多く認められる。余市式土器では、同じ粘土帯積み上げ法をとるものの、乾燥を待たずに積み上げを行なうため、指頭による器面の押圧・粘土帯の引き伸ばしが多く行なわれる。その結果、器壁の厚さは不揃いで、指頭圧痕が多く残り、擬口縁は生じない。

調整は、短刻線文土器群では器内外面とも丹念に行なわれる。内面には、細密条痕や稀にミガキを見る。口唇・底面についても丹念にナデが行なわれ、平滑な面を見せる。また、底部端には、底面の調整に伴って、親指幅でナデの1周する例が多く見られる。余市式土器の調整は粗く、所々に粘土帯接合面のすきまを残す。ミガキや細密条痕は認められない。底面は著しい凹凸を残す。

施文については、まず短刻線文土器群の縄文は、全例単節の斜縄文で、横位回転による施文の出現率が高い。条がよく通り、節は深く印される。羽状縄文が多く認められる。余市式土器の縄文は、単節と複節があり、縦位回転による施文の出現率が高い。条が通らず、施文単位間には空白部を残し、縄文原体のプレスは弱い。貼付帯は、短刻線文土器群では、器面の縄文施文前に貼付し、その上下端は強くナデで器面に密着させる。縄文は、必ずこの貼付帯の中央あるいは下端を境に、分けて施文を行なう。余市式土器では、貼付帯は、器面の縄文施文前あるいは施文後に貼付しており、斉一性がない。貼付帯の上下端はナデず、器面との間に明瞭な段をもつ。貼付帯の縄文は、器面と連続することなく別個に施される。貼付帯によって画される無文帯については、短刻線文土器群では、器面および貼付帯の縄文施文後に両帯間をナデ消して形成している。余市式土器では、縄文施文前の器面をそのまま利用しており、器面および貼付帯の施文の際に無文帯にはみ出した縄文は、ナデ消されずに残る。

器種構成 短刻線文土器群と余市式土器では、口径によって設定した大別器種の在り方に類似が認められるものの、器形自体は明確に区分される。また、短刻線文土器群における器種のバリエーション、特に壺形土器の存在や小形土器の多様さは、余市式土器に認められないものである。ただし、先に述べたように、本遺跡出土の余市式

土器が、本来の器種のセットの全てを満たすものかどうか疑問の存するところであり、今後の他遺跡の調査・検討によって、種々の器種がこれに加えられることも十分に考えられる。

以上の総括から、短刻線文土器群と余市式土器の関係について、以下の結論が導き出せる。

1. 短刻線文土器群と余市式土器は、その製作手法・器種構成の相違から、互いに独立する別個の土器群として定立し得る。

2. 出土状況および文様構成の類似から、両土器群が時間的に極めて近接するものとしても、製作手法・器種構成の違いから、それぞれが一方から他方へ連続的に変化した様相を示すものとは考えにくい。むしろ、両土器群は異系統として把えるのが妥当であろう。

なお、このような両土器群の系統の相違を考えるための具体的資料として、本遺跡で出土した大木系土器と、道央地方に分布するトコロ6類系土器が上げられる。即ち、短刻線文土器群における内面調整の精緻さ、砂粒をよく鎮静し、時にミガキが加えられる平滑な器面の状況は、大木系土器の内面調整に類するものである。また、このような事実を上げるまでもなく、SP38竪穴で出土した曲線文をもつ短刻線文土器（第2章図98-9）の例から、大木系土器が短刻線文土器群に少なからぬ影響を及ぼしていたことが考えられるのである。一方、余市式土器における成形・調整の粗雑さは、トコロ6類系土器のそれに通ずるものであり、筒形を呈する直線的な器形は、トコロ6類との類縁関係を強く示すものに他ならない。この類縁・出自関係はまた、従来幾人かの論者によって示唆されてきたところである。⁸⁾

以上から、短刻線文土器群と余市式土器両者の系統の相違は、大島が第3章で述べたように、それぞれ大木系土器とトコロ6類系土器との類縁・影響関係によって理解されるべきであると考えられる。

V. 要約

千歳6遺跡で出土したⅢ2a群土器、Ⅲ2b群土器はそれぞれ、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる「短刻線文土器群」「余市式土器」として把握されるものであった。本論は、それぞれの製作手法・器種構成について分析・復元を行ない、従来その定義・区分が不明瞭であった両土器群の内容を明らかにしようとしたものである。

まず、胎土・成形・調整・施文および器形・器種の組み合わせの諸点について両土器群を検討した結果、両者の内容と互いの相違点を明らかにすることができた。さらに、この両土器群の相違については、従来の見解に反して、それぞれの系統の違いに基づくものと考え、大島が第3章で述べた通り、短刻線文土器群は大木系土器に、余市式土器はトコロ6類系土器に、それぞれ類縁・影響関係をもつものであると結論さ

れた。

- 註1) 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号, 1981年
- 2) 擬口縁とその逆形の観察については、次の文献を参考にした。佐原真「山城における弥生式文化の成立——畿内第一様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第50巻第5号, 1967年
- 3) この用語については、次の文献に従った。横山浩一「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化研究所紀要』第2巻第14号, 1979年
- 4) 資料実見にあたって大島の便宜を受けた。
- 5) 各種土器の機能の推定には、次の文献を参考にした。佐原真「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣, 1979年
- 6) 峰山巖氏表採, 札幌医科大学第2解剖学教室保管。
- 7) 三橋公平・峰山巖「入江遺跡発掘報告」『北海道の文化』12, 1967年の掲載分, 上記同教室保管。
- 8) 例えば, 桑原護「余市式土器——その研究史と現状, 円筒上層式土器の関連について——」『考古学雑誌』第54巻第1号, 1968年